

たが、この点についての確定的な原因はつかめなかった。労働としては、飯米農家が主たるリンゴ栽培農家である関係上、リンゴと稲との労働力の競合が問題となるが、盆地北部の1毛作で開花期が遅い地域と、盆地南部の2毛作で開花の早い地域との接合部に於て、特に著しい競合が生ずることがわかった。販売・流通としては、生産量・品種・輸送・市場について述べた。長野リンゴそのものもつ特性(例えば早出し)に加えて、市場との位置関係及び輸送面での有利性がうまく生かされてはいるが、一方価格ののびなやみ及び4大市場に於ける県産リンゴの地位(売上高)低下など、当面かかえている問題も多い。

第5章 3地域の対比

盆地内の3地域をとり、それを対比させることにより地域の違いが、具体的にリンゴ栽培上どのようにあらわれてくるかを考察した。自然条件としては、地形・水利・土壌・小気候を調査した。3地域に於て勿論様々な条件が絡みあって、そこにリンゴ栽培を行なわしめているのであるが、茶臼山麓部では主として土壌的に負の条件が、厚川南部氾濫原平野ではリンゴの経済的有利性が、松川扇状地では水利的に負の条件が、主としてリンゴ栽培を推進させる力となっているのではないかの考えに至った。小気候と関連深いと思われる開花期は非常にきちんとした違いを見せている。社会条件としては、導入時期の違い、主産地・非主産地の違い、共同化等について考察した。しかし、導入の違いは、「発展」の所で述べたとおり、地形の違いによるものであり、又、上記の様に土壌その他の条件を通しての地形の影響が大であることから、盆地内での主産地を決定しているのは地形ではないとの考えに至った。

南多摩郡多摩町・稲城町における農業と都市化

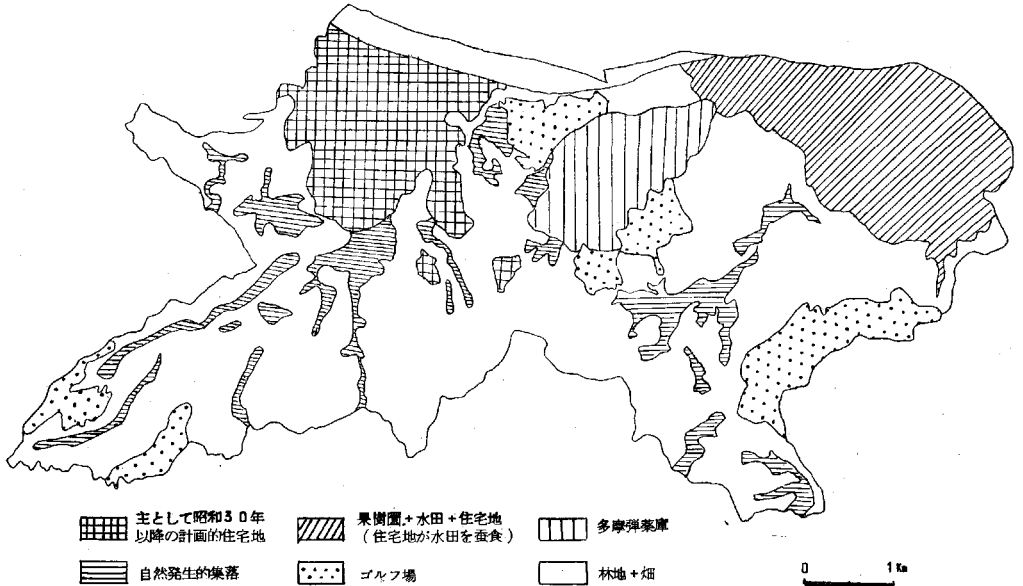
森 宏 子

本地域は東京の中心より約28km離れた東南郊に位置し、昭和32・33年頃までは農業土地利用が主の近郊農業地帯を形成していた。しかし、最近の都市化によって農業の不振はさけられなくなりつつある。

少し前まで人口の新たな定着は平坦地に限られていて、丘陵部はたとえ交通の便が良くても宅地化がほとんど行なわれなかった。しかし、昭和30年頃から強大な人口圧による宅地需要は農地山林で残されていた丘陵部を宅地に変化させつつある。本地域はまさにこの丘陵部に位置し、昭和32年頃から都市的土地利用の増大、人口増加、特に都市的人口の増加、又は農業の後退など、諸々の

都市化現象が見られるようになり、昭和35年頃からは加速度的にその傾向が強まっている。

本地域の都市化の特徴は住宅地化が主であること。そしてその新たな住宅地は区部、及び川崎市



に従業地をもつものの住宅地である性格が強いことなどである。換言すれば、純農村的だった本地域において、人口増加 — 都市の人口率の増加をもたらしたものは、本地域外に従業地をもつ転入者であるということである。又本地域の新たな住宅地の中で、丘陵部の団地が予定をも含めてかなりのweightをもっていることは、多摩町の桜ヶ丘のように、その後団地周囲に市街地を形成することが考えられる点で注目される。団地造成は、現在、本地域では都市化の先兵ともなっている。

現在、本地域の丘陵部の人口改変面積の中で大きな割合を占めているものとしては、団地の他にゴルフ場がある。緩傾斜を利用したゴルフ場の開設は、新たな都市化の課題ともいえるべきものである。

いずれにしてもこの都市的土地利用の増大している今日、本地域の農業には2つの大きな傾向が見られる。まず1つは一部の果樹類、蔬菜類、花卉植木類及び養鶏など近郊立地を背景に商品性の高いものへ階層分化を成長させ、都市化対応農業経営とも目されてきていることである。その反面、都市的土地利用の増大は直接農耕地の減少を意味するとともに耕地条件の悪化をも促す。農耕地の減少は経営規模の縮小化、更に農家の兼業化、脱農化を促進する。そして、耕地条件の悪化 — これは直接、稲をはじめとする作物の反当収量を低下させているのだが — は更に農業志向を弱める。

この期にいたると農地は生産手段としてよりも財産としての意味で保持される場合が多くなり、専業農家にも地主・家主化していく傾向が見られる。

将来本地域の農業の衰退傾向はますます強まるであろう。これは農業従事者自身の意識の中にも農業衰退を許容するものがあることから当然想像される。ニュータウン計画地域に指定されてもいる折から、現在の本地域はその意味でちょうど過渡期にあると考えられよう。

清水市南部の地理学的研究

— 特に温室園芸農業の考察 —

米 重 正 子

調査地域は静岡県中央に位置し、東京と名古屋のほぼ中間にあたり、静岡市に隣接している。第1章では本地域の背景として自然環境について把握し、第2章では土地利用及び産業構造の変遷から、清水市南部における都市化の進展とそれに伴った農業の地位の変化を主に考察した。第3章では都市化の影響を受けつつある農業の現状を分析した上で、主要作物を主な指標として農業地域区分を行ない、各農業地域の性格をみた。第4章では、その中でも典型的な商品生産農業地帯である高等園芸中心地域のうち、三保の温室園芸農業地帯に焦点をあて、その成立と発展・現状をみた。これにより、温室園芸発展の要因を考察し、また温室園芸農業の都市化への抵抗力について分析した。以上を要約すれば次のとおりである。

本地域の地形配置は北部の庵原山地、三角州性の清水平野、南部の有度丘陵及び三保分岐砂嘴と、かなり複雑であるが、土地利用も地形とかなり密接な結びつきをもっていることが特徴である。特に農業土地利用は山地・丘陵地でも自然条件のよい所はミカン栽培、それ以外は比較的悪条件に耐える茶栽培、有度山南面の急傾斜地は石垣イチゴ栽培、平野は水田、砂礫質の三保砂嘴は主に温室栽培というように地形を生かして適地適作的な利用がなされている。また清水市南部は、静岡県下でも暖地帯又は特殊暖地帯に属し、農業においても恵まれた気候条件を持っている。しかし、本地域は貿易港である清水港の存在により、昭和15年頃からの軍需工業拡大を契機として、港周辺の人工埋立地の工業化が進み、その後も工業都市として発展をとげ、現在輸入原料を主に利用した製造業が、就業人口からも生産所得からも圧倒的に高い地位を占め、産業構造は都市型を示す。

農業の地位は相対的に低下しつつあり、静岡県下でも都市化の影響を最も大きく受けている地域の一つとなっている。このような状況の中で比較的収益の小さい水田・茶園・普通畑の減少に対して、ミカン園や温室の面積は増加しており、ビニールハウス栽培や養鶏が盛んになってくるなど、